

911.3
シ

霜の峰



あまのついでに花のさきつる妻のうらみ

サカニ 昔こ

あつらぬあすは那の梅のさか

暁雨

妻の月沖の櫓おまよふとわたり

東園

青柳の吹きて香をそと大まことこ

如罔

そよよとつとみおあはれ川柳

きそ

油郎してまをた柳のらさうと

一壺

むかひさきつものあつて妻の山

其成

夕暮の二葉は月を影あか

清水

海きのよみおしほちり初まら

芳之

妻のや妻の祈禱のとうけ

大阜

よよのの瘧え出くつと妻のぬ

雄淵

妻のやまをせうとさきけらら

玉洞

あつて水はひ里をさつとくら

沼原

見るとちよふ人お世ふる櫓の那

星布

ちよもよ柳のそねおとさうれ

九船

花の尾をさかあつて妻のさ

柳井

ちよもよかむと押しつとさうれ

雄淵





そらゆゑ佛もあはしくころもえ

東卿

旅人よあはれむとさそお月もる

尾草 妻人

わらぬまはに二子ありていそく地

ナラ 松栢

骨も老わらよいとちかむるほり

素心

本も草も瘦へたつた花柳堂

其言

角あふる河をなほうかたつと

白蘿

船家をとつむらもあまふこしんが

少年 碧藍

跡もく麻のよぬまけ草のあは

夜鴨

智をなれを記すすくひらま  
 可らきて杜舟ぬす人泣く  
 首尾もちの残もいる白ぢしん  
 おと一いれらじつをらむ浪のあと  
 鯨の骨ぬ世界をかこつり  
 一ののちもいぬらけ一のた  
 数もきて二十のあと残り  
 雨のおちあぬる家も来にさる  
 鐘つひも水鏡ととも。浦田子  
 文彦  
 在障  
 手  
 柳在  
 石  
 志守  
 魯外  
 一風  
 三乳  
 丁尾  
 棠山

思ふは海にさるる月の  
 おこめや海にさるる月の  
 来つらる海にさるる月の  
 英一淋一山のほこるも  
 あらゆるあふぬる月あふ  
 端のいさよも入世つら  
 雪のたのあけ一掛一病のち  
 雪のたのあけ一掛一病のち  
 鼻をよも一ら磨の鼻をよ  
 之曲  
 五胡  
 斜白  
 府黄  
 富荒  
 雪香  
 文白  
 故吏  
 測丸







兼島のこゝろのこゝろぬう秋の風  
 秋風やのぞきよつゝに南はし  
 ぬも地しおまなてほの月  
 秋の月しつゝ一思ふおほそ  
 草刈つゝおのちよのしよが  
 兼島のおのちよのしよが  
 君り代のおのちよのしよが  
 おのちよのおのちよのしよが  
 蛤の泡もしほり秋の風

カハリ 桂五  
イセ 椿堂  
ス 素集  
 顧言  
 柳郊  
 雄河  
ナ言 し二  
無 所央  
 桐栖

浅茅宿具り

萬代や山のどろろの月士朗  
 入江ししぬ松の秋風  
 鳴穴六のゆきおまなてほの月  
 ちりけつゝおのちよのしよが  
 ぬも地しおまなてほの月  
 西青くおのちよのしよが

人  
 人  
 人  
 人

とよほふらひのよみ依るは

花の香の夜ふさく

鴨の毛をさくまを打拂ひ

肉味噌の嗅ふじせる美し

足指もさか空見を使ふ言

其妻を交埋すハ半浴のしきり

喉もぬるしきとぬる花の香

人(側)人(側)人(側)人(側)

くぐくは終一水のけり

はくしとすそのけりくは終人

此世園鳥リ

及押のふら何くは終物間

湖も雪田も静かよは終岳

野ら此舟の栄を垢先士朗

多葉の枝ふさく静メる見

香のこころに川をき枝の花

原をのぼる空のたもとに

酒をこぼす麻福田の

何となくくもる尾上の

苗をいへし生草青柳の

領のさかすく斗ひさし

勢をたかす下流は

朗 同 兄 乾 朗 全

菊十枝のたのしみ月が

美を通すあけの夜桂五

食をこく下へ葉山を

雲をゆきせら河をさす

今もくわ泊渚の曙三輪の

初花に衣巻のほそはく

しを射る顔は芽萩を射好七

五雄

+

水鳥の毛もつひぬを二月月

若 養乳

三月月も冬はうきうき梅柳

雄御

ふれ草み向はるるや小ぢり身

玉麿

うらもちや都の年か朝り地

玉 洞

とつあいの心うらや隅田川

下 宋郎

水仙や都の郊の鳥ふ多に

扣角

月のあはるさけながうらうらと

东三

うらもちの佛も十夜の家

右揚

うらもち月うきうきちと

京 月居

さぶげし 毛尻を 不血の塵 洞

日人 山鳥の尾の 玉の尾の 洞

ほせりよまけな 後ぬきの 毛

雄 潤 俊 乾

この 羽 髪 を 日 人 の 妹 として  
うぶな 髪 を まけ 様 であ げ たら ぬき  
入 り ぬき 髪 を まけ 様 の 毛

水鳥の毛もつひぬを二日月 若 養乳

三日月も冬はうきうき梅柳 雄 潤

うら草花のうきうきやふち力 玉 麿

うら草花のうきうき朝り花 玉 洞

さつあいのうきうきや隅田川 下 宋 邸

水仙や花の外は鳥の多ん 扣 角

月のあけがけがうきうき 東 三

鳥もあけがけの佛も十夜の家 右 揚

うきま月うきまうきうき 京 月 居

簫の音の響くしる雪の音  
 けしきかたしる雪の中は清き雪  
 空の音の響くしる雪の音  
 柳の音の響くしる雪の音  
 柳の音の響くしる雪の音  
 月しる雪の音の響くしる雪の音  
 業平の音の響くしる雪の音  
 松見の音の響くしる雪の音  
 池の音の響くしる雪の音

梨冠 京  
 春思 京  
 柗涼  
 李投  
 柳郊  
 玉層 上  
 幾雪 上  
 茂良 京  
 池亭

雪の音の響くしる雪の音  
 山鳥の音の響くしる雪の音  
 大雪の音の響くしる雪の音  
 雪の音の響くしる雪の音  
 雪の音の響くしる雪の音  
 雪の音の響くしる雪の音  
 雪の音の響くしる雪の音  
 雪の音の響くしる雪の音  
 雪の音の響くしる雪の音  
 雪の音の響くしる雪の音

陸金  
 坂耕  
 子孝  
 文雅  
 物俵  
 九和  
 直云  
 吟六  
 一峯

こから〜や水のまねとよ家も

子孝

風や波もわたりあそ

文雅

はるるもさるるもあそ

物俵

こころのこころのこころ

九和

大雪よあつてはあめの初舞

真雪

山鳥のあそびささ〜

喙六

雪の人若れ一輪よ〜

一峯

松嶋の松をきりて  
行年九月廿五日  
東京山

京

石聖  
斗



あかきもよ降つて山一々  
 物お果のこら果をいあこら  
 こからいれきつたつらうのあり  
 夕ちつとぬふり海よ事入を  
 あらや月影よももらつたよ  
 志らふは海つやほと夢あふく  
 夢を昔一人を教まぬあふく  
 あらやあふ海の上  
 未母さる今つたあふく  
 成美 小登 飯耕 餐莫 葛父 棠山 如雄 宜山 芙蓉

風をさる海あはつた  
 文をさる電のあはつた  
 こがらやあはつた  
 寂けも雪のねれあはつた  
 市人のあはつた  
 ちつたあはつた  
 松はつたあはつた  
 行年つたあはつた  
 佛二 表園 六甲 宇孫 琴雨 秋逸 幽喃 石翠 斗翁

文化丁卯青陽人日

雉洞撰



世書了昂仙真至系川多更一宿  
口宿了客入城下五方所嵐溪上  
乃下分江口也

梅庵

